

元木 靖著：『中国変容論 食の基盤と環境』

海青社、2013年、360 p.、3,800円+税  
ISBN978-4-86099-295-8

シンプルなタイトルと黄土高原を連想させるような表題のこの本を手にしたとき、著者がこの本に込めた並々ならぬ力をひしひしと感じたのは紛れもない事実である。本を開く前にこんなオーラを感じることはあまりない。それは著者がこれまで30年近くにわたって積み重ねてこられた中国研究が静かに鈍い光を放っているようにもみえた。

ページをめくると、中国各地から集められた膨大なデータとそこから紡ぎ出される本書の内容に圧倒される。例えば、中国の一級行政区は23省（台湾を含む）、5自治区、4直轄市、2特別行政区（マカオ・香港）からなるが、このうち著者がフィールドワークを実施したのは21の省・自治区・直轄市で、その回数は都合50回あまりとなる。本書にはそのうち10の省・直轄市の調査が収録されている。同時に、170枚を超える

豊富な図表や写真も特徴であり、中国という大きな対象をとらえる上で読者の理解を助けてくれる。

さて、序を読むと著者の基本的な立ち位置がよくわかる。ラティモアの「中国——民族と土地と歴史——」が下敷きにされているように、それは決して戦後成立した「中華人民共和国」研究ではない。中華人民共和国という国家の位置する地域、地理的な範囲をさしての中国である。ここを読み違えないようにしたい。また、経済成長のめざましい中国の都市の話でもない。テレビなどでよく目にする高層ビルが林立し、富裕層が闊歩する中国ではなく、その背後に奥深く広がる農村部分を含めた中国をとらえようとする立場である。いわば点（経済成長する都市）としてとらえようとするのではなく面として中国をとらえようとする試みである。

そのために序においては本書で注目する3つのキーワードが示される。「個別の研究ではなく全体を見渡す視野」「地域」「文明史的な視点」である。それを踏まえて、本書の構成をみてみたい。大きなターゲットに正面から取り組んだ堂々とした構成がみてくる。

本書の構成は、第I編 水、第II編 土地、第III編 食糧、第IV編 環境の4部からなる。第I編は長江流域における早期都市の立地と水利の環境史という副題のもとに、第1章：長江上流域——成都平原三星堆遺跡周辺の灌漑水利変容、第2章：長江中流域——澧陽平原・城頭山遺跡周辺の灌漑水利変容、第3章：長江下流域——太湖平原・良渚遺跡周辺の灌漑水利変容、の3つの論考が收められる。第II編の副題は人口圧と農地開発／土地資源問題で、第4章：人口と農業・土地資源の関係、第5章：経済改革初期段階の土地資源問題、第6章：経済成長期の都市化と土地資源問題、からなる。同様に第III編は、市場経済化の産業構造調整と食糧生産地域の変容と謳われ、第7章：構造調整の概念と中国農業構造調整のプロセス、第8章：中国における食糧生産構造変化の特徴、第9章：東北地区における食糧生産の地域的展開、第10章：吉林省におけるトウモロコシを中心とした農業的土地利用形成の分析、第11章：黒竜江省における農業的土地利用の展開と水稻作发展の意義、第12章：WTO加盟前後の食糧生産地域の構造変化と課題を收めている。最後の第IV編には急速な経済成長に伴う社会の変容と地域環境問題という副題が付けられ、第13章：経済成長と低地帯の水汚染問題の生成構造——長江デルタ、第14章：乾燥世界の地域変容と水利競合——新疆ウイグル自治区のオアシス、第15章：農耕社会の変容と牧畜社会の草

原破壊——新疆ウイグル自治区グルジャ県、第16章：棚田世界の地域変容と貧困か問題——雲南省紅河自治州元陽県で構成される。

序における3つのキーワードに含まれているわけではないが、本書を俯瞰して、評者は資源・資源論という視点も重要なキーワードになっていると理解した。以下、この点を念頭に評させていただきたい。

第I編は「水」で、真っ正面から中国文明を論じるべく長江流域が取り上げられる。ここでまず読者の目を引くのが第I編の扉にかけられた一枚の地図である。それは長江流域に日本列島を重ねた地図である。下流の南京に北海道の稚内を重ねてみると、武漢は津軽海峡のあたり、洞庭湖は秋田県のあたり、重慶は若狭湾のあたり、成都は岡山のあたりにあてはまり、上流部は九州のさらに西へと続く。シンプルな地図だが、はたして私たちはこうした視点で長江流域をみたことがあつただろうか。読者に地域のスケールを直感的に訴える効果的な地図である。

本編を構成する3つの章では四川省の成都平原（上流域）、湖南省西北の澧陽平原（中流域）、長江デルタの太湖平原（下流域）にそれぞれ成立した都市・都市文明を治水・利水（灌溉）の観点から考察する。例えば、第1章では成都平原北部の三星堆遺跡周辺の表層地質や地下水分布、地形から三星堆文明の成立について治水上の安全確保や交通上の利便性確保という要因を提起する。その後、秦の治世下の都江堰の建設とそれに伴う稻作の發展、今日に至る平原南部の都市の成立が紹介される。さらに現在の当地の農村、農業の状況を把握しつつ、平原北部が都江堰の灌漑水利の恩恵を受ける南部に比べ、低生産性のまま20世紀まで存続し、社会主義革命後の大規模事業によってようやく南部並の生産性を獲得することが示される。そして今日、農村からの労働力流出（兼業化や出稼ぎ）、稻作から商品作物への転換、工業化に伴う環境汚染、成都を中心とする平原南部の著しい都市化の進展など、数千年にわたる当地の灌漑水利と稻作による関係が全く新しい局面にさらされていることが指摘される。

同様に第2章では澧陽平原のため池と用水路（先史時代）、池沼開発と揚水技術（歴史時代）、域外のダムからの導水（現在）という具合に、第3章では長江デルタで連綿と続けられてきたクリーク網の開発、再編が今日の都市開発、工業開発にさらされているという具合に考察される。いずれも、水資源の利用による農業生産性の向上、それによる都市の成立といった数千年の営みが、グローバル化を踏まえた都市のすさまじ

い拡大によって変貌を遂げつつあることが示される。また、これが本書に通底する主題でもある。水資源の利活用による農業生産性の向上とそれを足場にした都市文明の勃興は、多くの文明においてそうであった。数千年にわたって域内で繰り返されたその枠組みが今新しい局面にさしかかっているのである。歴史的に一大食糧供給基地であった長江デルタが今日一大食糧消費地域に変貌していることは象徴的である。

第Ⅱ編は「土地」、水と並んで農耕文明の基礎をなす土地である。ここでも真っ直ぐに対象を掴む著者の手が見えるようである。第4章では革命後の人口増加と農業の役割、経済改革に伴う地域間格差と人口流動が概観される。それは、中国の抱える農業・食糧生産の問題の伏線である。農業依存度の高い中国において食糧生産の伸びが一部地域に偏っていることは何を意味するか考えなければならないのである。

第5章では改革以降1990年代半ばまでに焦点をあてた土地資源問題が展開される。主な論点はこの時期の耕地面積の減少と零細化である。続く第6章では90年代後半以降に焦点をあてて、日本、韓国、台湾との比較も織り込みながら耕地の問題が語られる。1つには零細土地所有と多くの人口、高い人口密度という東アジア／稻作アジアにおける食糧自給率の低下が描かれる。日本や台湾、韓国の状況が如実にそれを示す。2つにははたして中国が同じ軌跡をたどるのかということである。はたしてインドと並び10億以上の人口を抱える巨大な農業国でもある中国がそのような状況になったときに、どのようにして安定的な食糧供給が担われるのだろうか。また、膨大な農業人口はどうな産業が吸収するのだろうか。日本や韓国、台湾のような「小さな国」とは同じ理屈が通用しないことは明かである。同様に中国がアメリカのような産業化した農業（Industrial Agriculture）を展開することも不可能である。アメリカの農業地帯は人口が希薄であるのに対して、中国のそれは分厚く、農業以外に巨大な農村人口を吸収するすべもないからである。これが中国の抱えている人口と土地資源（耕地）の問題である。明快な解や方向性が見いだされているわけではない。しかし、私たちは少なくともこの国がそういう状況にあることを理解しておかねばならない。

そしていよいよ第Ⅲ編は「食糧」である。「世界の工場」は既に言い古された言葉であるが、その一方にある中国の農業や食糧生産についてはあまりにも関心が薄い。著者の関心は黙々とそこに向かって進んでいく。まず第7章では経済改革以降の中国の食料需給と

食糧生産が概観され、食糧確保の段階から食糧増産の段階、そして今日の食料を経済手段として農村・農民の生活向上を目指す段階が提示される。しかし、はたして食料を経済手段とした生活向上は可能なのか（部分的には可能かも知れないが巨大な中国全土の農村でそれをどのようにして実現するのか）、また、基本的命題である食糧の確保はクリアされるのか。大きな問い合わせが發せられる。続く第8章では『中国統計年鑑』をもとに、1978年以降の播種面積、生産量、灌漑面積、化学肥料使用量の変化などの資料から、野菜などの商品作物の増加の反面、穀物類の栽培面積が減っていることが示される。また、南北という地域的な枠組みの中では米、小麦、トウモロコシという三大穀物の生産において北方に重心が移りつつあることが示される。

第9章以降は中国の食糧生産を牽引する北方の農業発展の中心的な位置にある東北3省に焦点があてられる。第9章では水稻作の北進をはじめとして東北3省が全国の播種面積に占める割合や生産量のシェアなど、この地域の今日の中国農業における位置が概観され、第10章では吉林省のトウモロコシ生産、第11章では黒竜江省の稻作についてさまざまなデータとともに紹介される。それを踏まえて第12章で課題が議論される。これは単に第3編の課題というだけではなく、第1編から展開されてきた水資源、土地資源を踏まえた食料資源という本書が抱える1つの大きなテーマについての課題である。

そこでは既に触れた長江デルタとの東北3省との対比から、「南糧北調」から「北糧南調」という農業の構造変化が指摘される。確かにそれは著者のいうように、高度経済成長期に西南日本中心の稻作から東北日本中心の稻作へと転換したことと対比してみると興味深い。しかし、それによって前段までに提示された中国の人口と土地資源の問題、食料資源の問題の解決の方向性が示されたというわけではない。東北3省の農業の在り方と長江デルタのそれに対するアプローチは確かに1つの鍵穴かも知れないが、答は未だ見いだせない。それへの取り組みは始まったばかりともいえるし、その解法は今のところ世界のどこにおいても解き明かされてはいない。その意味では人口と土地、食料資源に関わる全く未知の領域ともいえる。しかし、現代を生きるわれわれはそれに対する答を見いださなければならぬのである。

食料研究を旨とする評者の立場からは、私たちが食べる物を誰がどう作るのかということ、少数の農民が

圧倒的多数の非農民の食料を作ることができるのか、という問題提起ととらえられる。もともと農民が少なかった（先住民を駆逐した移民の国である）アメリカではできたことも、農村人口の分厚いアジアの稻作地域で同じことはできないのではないか。日本や韓国、台湾のような「小さな国」では食料を外部依存に切り替え、すぐなからぬ農村、農業人口を都市・非農業人口として吸収することができた（その過程での農村部に形成されてきた伝統や、文化、社会などの多くが失われたものの）。しかし、「大きな国」の中国では同じ理屈は通用しないだろう。巨大な人口に対する食料供給とこれまで巨大な農村・農業人口を非農業部門にどのようにして展開するのかという明確な解が見つからないからである。人口と土地と食料の関係についての中国の試みは人口稠密な東アジア稻作地域における壮大な実験ともいえる。それは未だ誰も経験したことのない食糧生産～供給の体系の構築であるともいえる。この点で評者の考え方は本書と全く同調する。

その際、この大きな問い合わせに対して、著者が注目する観点として第IV編の「環境」が示される。第13章では経済成長に伴う長江デルタの水の汚染問題がとりあげられ、経済成長をひた走るかつての食料供給基地の姿を水質汚染の側面から読み解く。第14章、第15章では新疆ウイグル自治区の水問題と草原破壊・土壌浸食、さらに第16章では雲南省の山間の棚田耕作地域における貧困問題を取り上げ、周辺地域においても前段までに長江流域や東北3省でみた経済開発の影響に組み込まれつつあることが描き出される。その意味で周辺地域の環境問題も1つの政治的な統治の体系の中にあることはまぬがれえない。その際、著者の前著「食の環境変化——日本社会の農業的課題——」を思い浮かべた。共通する著者の視座をみることができる。あわせての読書をお勧めしたい。

最後になるが、はしがきの末尾に、「本書を父と義父に捧げたい」とある。著者の父君は第2次大戦中に2度大陸に渡り、当時の状況を幼少時代の著者に何度も語ってくれたとある。著者の中国研究のルーツはそこにあったのかも知れない。ちなみに著者の伯父は旧満州で戦死しているし、大叔父は大邱で商売を営んでいた。こうした大陸との関わりは決して珍しいものではない。親類縁者を戦前・戦中に連れれば、大陸に渡った遠縁に行き当たる読者も少なくはないであろう。そうした視点から中国を見つめてみることも必要ではないだろうか。ここで論じられた土地と人と食料資源の話は他所の国の話ではない。稻作アジアの共通して抱

える問題でもある。貧しかった戦前の稻作アジアの方が、この問題をより身近な問題として認識していたかも知れない。

(荒木一視)